

字未音後

六

農務省
圖書
第八冊

大政官文庫
和書門
一四三
二四三
四

內閣文庫
和
三函
六四
架冊

內閣文庫
番號 和 11143
冊數 4 (2)
函號 183 236

耕種





草木育種卷之下目錄

國字分類

以

稻

五

芋

九

りんご さくらげ 十三

磯松

四

無花果

十

波

蓮

十

胡枝子花

四

一船棋

四

薄荷

廿

望江南

廿

むら

廿九

仁

蕪

今

人参

廿

日

四

保

菠菱

七

防風

廿

牡丹

廿二

酸漿

廿

木瓜

廿

邊

絲瓜

十

紅花

廿

草木育種卷下

明治十年購求

本草綱目

土 冬瓜 十四 番南瓜 十四 番椒 八漂注

玉蜀黍 二十 燈心草 世四 當歸 廿四

木賊 廿九 兎絲子 廿九 玉藥花 四十九

蓮 茶 十八 甘露兒 十一 馬鈴薯 十

地黄 廿六

利 龍膽 廿五 林檎 十六

遠 敗醬 四十二 万年青 四十六 冬冬 四十七

和 草綿 世四 芍薬 八 黃連 世三

加 蕪菁 七 芥 七 黃獨 九

冬葵 八 甘草 世三 莪朮 廿四

烏頭 世三 燕子花 四十二 萍蓬草 廿九

棟 十七 海紅 世六 槭樹 五十一

輿 薏苡仁 六

多 大豆 六 蘿蔔 七 蒼蓮菜 七

蓼 八漂注 淡芭菰 二十 蘭蕉 四十四

澤瀉 廿九 百兩金 四十七

祀 連翹 世三

曾 蠶豆 十三 蕎麥 六 火蕉 四十分

津 佛掌薯 九 躑躅 世七 山茶 世七

称 葱 八

草木部 卷下

二

奈

菘

七

茄

十

刀豆

十三

瞿麥

四

梨

十六

南燭

廿九

良

幽蘭

四

落花生

二十

武

麥

五

紫草

廿五

梅

十五

宇

うま

八

鬱金

廿

為

以見於

遠見

欠

慈姑

十一

烏芋

十一

高良薑

廿五

栗

十六

香橙

十七

桑

廿三

枳

廿

山梔子

廿

也

商陸

廿

紫金牛

四

箭竹

廿四

楊梅

十八

末

甜瓜

十九

醬瓜

十二

鹹蓬

十二

硃砂根

四

竹蘭

四

江南竹

十四

苦竹

十四

松

廿三

楹梲

十七

蔓荊子

廿

茉莉

廿七

玫瑰

廿八

訃

嬰子粟

六

不

款冬

八

薊

廿五

猷歲菊

四

風蘭

四

葡萄

十九

紫藤

四

木芙蓉

廿

扶桑

廿七

古

胡麻

六

葯蕒

十一

五味子

三十

江

豌豆

十三

延胡索

廿五

藍菊

四十二

冬

廿九

天

天門冬

三十

鐵線蓮

四十

安

粟

五

赤小豆

六

藍

廿四

蜀葵

四

牽牛花

三十

紫羅蘭花

四十四

蘭菘

四

龍舌草

廿二

杏

十五

左

豇豆

十三

甘蔗

十九

甘藷

九

櫻

四

樟耳細辛

四

蜀椒

十九

石櫛

十八

櫻

廿五

茶梅

廿八

山茱萸

廿

仙人掌

四

山丹花

廿八

幾

黍

六

胡瓜

十四

菊

廿六

桔梗

廿五

金盞花

四十四

芍藥

廿七

龍骨木

四

金橘

十七

桐

廿三

金櫻子

三十

由

卷丹

十一

壺盧

十四

柚

十八

美

柑

十七

之

越瓜

十三

同蒿

七

萹

十二

芍藥

廿

紫菀

廿

海州骨碎補

四十九

石楠

廿九

惠

江見

比 稗 六ヲ 蒲蘆 世五ヲ 白芷 廿四ヲ

美人蕉 世少 頰桐 世七ヲ

毛 桃 十ヲ 紅葉 四九ヲ

世 仙人穀 十二ヲ 葛蒲 廿今 芎藭 廿四ヲ

石竹 四一ヲ 剪紅紗花 四一ヲ 千日紅 四四ヲ

牡丹 廿九ヲ 薑 八ヲ

付 西瓜 十九ヲ 水仙 四一ヲ 李 十五ヲ

草木育種卷之下

東都 岩崎常正 編録

穀類 十一種

稻 藏玉集に菽草と名。粘るるをうるう。粘るる。其

類と云粘あるらららららら。是と糯と云皆百穀の長也。

人命のかるららら。是ふこそて。まて。まて。皆三百餘品

いふ。米ハ美濃をよとて。又尾張播磨遠江三河等次でらら。

年のまて。ちりせ。ちりせ。八十八夜の茶後と苗代の旬と。田植

立夏の茶後を旬と。勿論風ふよとて。茶後あて。田植の

日をよとて。苗代より十九日め。亦五十一日めを苗代とて。挿

五

胡麻ゴマ 草本

夏ごまの葉ハ又あり。蘭草ニ似たり。白ごまハ又あり。

葉小細葉なり。灰汁小人糞をませ焼よく粒へー○花鏡小云。

種時忌西南風

蕎麥ソウ麦 草本

信濃名産なり。野云又真云よそより。肥の土土地

小より。灰小人糞をませ用也。葉の浮新より川なり。或云そむと。

雉子の肉と同一く食せへり。合あり。夏の土用あけてより。

十日廿日の間小病と旬とす。至て早ゆふ中も病へー

嬰子粟ウシゴ 草本

八月種を下し。灰人糞を落してなると焼なり。

又むごんそり色。嬰子粟ニ似く小きもの之肥も同一○花鏡云。

錦被花未種前須糞地極肥。後以釜底烟煤拌撒用細泥蓋之。

可免蟻食

菜類

四十二種

蘿蔔ダイコン 草本

春夏の泥をり或時云の圃を焼く耕。灰小人

糞をませり。瓜入り切返し。葉を落し。一回一回。雨後に行地をけり。

多り。又紅蘿蔔あり。肉皮皆紅軟はして味より。

蕪菁カブ 草本

大根より廿日も遅く。角下。畑へ深く耕して種へー

又赤かぶあり。合へり。何れも肥人糞を用ひへー

松マツ 草本

たろる。夏中畑を耕し。肥を七月種瓜下し。小便瓜

くまして多焼てより。むぬの隙を考と考と。その上より焼てよ。

霜月よえあげて堆は焼くより。○芸薑ハ八月前冬并菜とす。

芋ハ九月廿掘あげ。山の目ありよき崖と二三尺ありて埋
ちをうけり。并貯蓄べし。

佛掌諸鎮江府志

四月以後いもを切く。切足灰と并山圃(穴を四

五寸掘。土をうき柔よくする。土へ竹の葉とまぐま合せ合て挿蔓

出て後根是人糞を入べし。九月十月掘るべし。

黄獨鎮江府志

貯蓄しるかまうむろごを。四月以後山知(穴とちり

四五寸一ツ挿しむる。け肥をくまを挿べし。

甘藷本草

又珠球いもとも云。薩州より来り。諸國小多。武

彦相摸。上総安房。其の砂地を焼く。味の皮赤とあるもの

上品あり。山ちめて焼くものハ形大なり。味劣。赤ちめても砂

まぢりたるものハ根より。四月甘藷を種とせしむ。葉ハ莖菜心にて
臭氣あり。葉ハ紅色なり。葉と挿ば白汁出。蔓二三尺あり。曲く
地へ伏ち瓜を交。地を有る如く。瓜をちりて。葉の両より根とせしむ。
甘藷と多。肥を用む。○生少く根瓜挿て水飛し。薯を採べし。
上品あり。根を煮て焼成。煮て食し。糧を助。肥を月ざる。人
民用小者あり。又小兒令て大便を和。虫をせせ。又疳病。小兒
常正按。さるふ。砂糖の甘味ハ。腹中して苦味。多。大人小兒とも。虫
積痞満小者。甘藷の甘味ハ。腹中して苦味。多。大人小兒の腹
中。細和とる。け。其ま。性粘滑。多。食ハ停滯。一。安し
馬鈴薯松溪府志 せうろいも。又。を。又。し。いも。と。色。雲。雲。

名カイトース加方言ヤアフルキト同。ともいふ。葉ハ菊ムシト大なり。

根ハ塊ありて黄獨似。鬚多。皮落して赤あり。焼

又煮て食之。種小ハ四月以野の肥地種人糞を焼ては。

十月根掘採種小ハ四月以野の肥地種人糞を焼ては。

掘埋置。春の末り出して種之。

加本二月以代の内へ種をまらせばけ肥をして四方を圍む

重バ暖めて又多くをも防ぎり。生て二三寸あらりて畑へ種べ。圃ハ

二年りあまを加とうぶる肥地冬の中人糞を入耕種種種付

所ハ爪あげたる把を切ませ種を種へ種ぎてお油糟人糞等焼べし

○茄ハよく煮てあくを出し合を下す。るま漬又ハ焼るじら毒あり。

多く食ふと必痰飲を生じ。又瘡家小兒婦人下部の病多し。
小兒ハ控て下り五疳驚風を生ず。大人も多く食ふ腋中小寒湿を
貯て後ハ脾胃と接し病腹痛等ハ物と諸病小忌て下り。
毒ありと舉て数べくを。然として世人常小食を田舎で
多く生ず。茄ハ價賤とて久く貯り小走又毒葉小
あまりと云ふ。茄ハ味よきを有す。

卷丹草 鬼ゆりハ花紅色多り。花の白ハ百合花と同て種入る

一。食料のゆりハ真ちあらく細き砂よりたる地を耕す。

その肉之粉糖を切ませ種を種へ種ぎてお油糟人糞等焼べし

雞屎と用てむす。葉のろよを生ずる寒風とり。ちくよせ貯る。

樗一花の若梢と二尺餘も摘切ハ根ヲ突入シ

甘露児草本 世々の湿地小宜し魚洗汁人糞を焼て下。九十

月以根を採り洗熱湯をうけて香油味噌を不浸て食を

薬草本 上総少く多也。是も茄と同く。一年種ハ根ハ

荒さる人。一二年体ハ細丸形を種べし。○春の末葉先で

花を生きて筒の形して長く肉より根の極るりのを出す。色

青し。後葉孤生す。形虎掌少似く葉の數多ハ種ハ山畑の

日陰下。根ハ細き茎を入。春灰人糞を用て下。秋根ハ

掘ハ根大少。傍ハ小き子と生きて是を分種す。

一

鹹蓬救荒本草 砂真土小宜し。春彼岸小種瓜魚洗汁焼く

よ。又海を不自生するをまらるハ低く地近。○岡水松ハ

又陸部少きとも云。形狀淡より多似く葉冬して肥より葉と採

砂小ませるも加とも小看るも下。葉て葉と厚。又吸おを用て味

仙人穀 文化丙子年初く多。種莧の形く葉の彼岸小種を

府人糞汁魚洗汁生きて焼べし。葉ハ鳳来紅不似く。茎ハ雞冠

似く。秋小むて長種を生きて形莧小似く。下ハ垂と尺餘子

葉を採菜となり。又葉の熟者たを採揉て火にてあぶれば白

を色たるを嬰粟と用て小。諸の菜へ振うけて食ハ甚香

蓮草本 秘傳花鏡曰。菜餅或麻餅屑鹽。又藕枝頭向南。以猪毛

用くより。大抵蚕豆のよ入りてより

蠶豆 草本 砂真土あり。七月種を蒔み中灰より人糞又干鯷

等をよせ根只焼べ

刀豆 草本 日月種瓜代の内へ蒔きよやげ肥を入れて畑へ穴を掘り

種を蒔く。朽と灰と人糞とよせ焼てより

越瓜 草本 三日月代へ種を蒔き苗一寸程ふらうたる時圃へ三尺

四方を瓜かんとよやげ肥を入れて種べ。夏中人糞小溝の水を

よせ焼べ。又苗と種を同干鯷を粉ゆて砂へよせ瓜ちへよせ

星 草本 星と口寺の大さ小をへ種をよ

将西瓜 草本 大抵越瓜のよ入り同

胡瓜 草本 種を蒔き人糞小溝泥をよせ入てよく耕し星

四月種を蒔くより。又干鯷を砂へよせ根只入るに実多し

冬瓜 草本 代蒔きをよせ四方も瓜を圃へ穴を掘りよやげとも不

種を蒔く。後人糞と藁茎よやげ合せ根只又多焼汁と焼てよ

番南瓜 草本 よやげ肥を入れて蒔き人糞藁茎を根只よやげ

か何しをよ入る月下。○番南瓜を多作藁茎と挿べ。法ハ藁茎と挿と

同ト。先よりすを挿てよせ生ゆて挿と挿。又よやげ焼とよやげ

度してよやげ氷水をよやげ藁粉のよやげよやげよやげ

壺盧 草本 四月初種を代蒔きよやげ肥を入れて星種べ。棚を

挿くよやげよやげ

梅ウメ 梅ウメより根ネを生ヒず。根ネ枯カハ朽クるコ。梅ウメの根ネを煮ヒて

李リ 李リ杏コ梅ウメ桃トウの類レ起ヒて秋アキ実ミを栽ウへ春ハル生ヒず。二月ニ桃トウ石シ接ツぐ

桃トウ 桃トウ本ホ種タネ樹ツ書シ曰ク。桃トウ八ハ五ゴ行コウの精セイ百ヒャク鬼キを制セイす。是コレと仙セン本ホと云フ

故コ小コ極キョク小コて符フを依ヨるコトも百ヒャク鬼キと制セイするコト有アるコト。桃トウ種タネ多タク桃トウ

十年ジュンネンより老ラウて実ミ少ショウく虫ムシ多タク。石シ小コ実ミを種タネす。秋アキ腐クバ春ハル生ヒず。

真マコト土ツチ小コ極キョクるコトは土ツチ少ショウく虫ムシ多タク。赤アカ土ツチ少ショウく虫ムシ多タク。湿シツ地チより生ヒず。乾カン

陽ヤウ地チ少ショウく。日ヒ陰インを種タネす。二ニ月ゲツ上ジョウ旬ジュン小コ桃トウ石シ接ツぐ。三サン月ゲツ枝シを切キ

とくくトククより。多タク年ネン根ネ只シ人ニン糞フンを燒ヒハ実ミ多タク。又マタ桃トウ樹ツ老ラウ朽クて洞ドウ小コ

多タクコト却ケツて数スウ十年ジュンネンをたタりぬル。種タネ樹ツ書シ曰ク。桃トウ樹ツ適テキ春ハル以リ刀タウ

疎ソ斫ソク之シ則スレバ穢タイ出デ而シテ不ズ蛀シユ

栗リ 栗リ草ソウ荒地コウチ或シテハ道ミチ傍ホウ小コ種タネ栗リの陰インハ緒ヨの他タ也ナリ。其ソノ力チカラの

十年ジュンネン餘ヨリにシテ木キ老ラウて実ミ扁ヘン子シ多タク。伐キて材サイとす。又マタ以リ之シ実ミを

府フ種タネす。其ソノ生ヒ土ツチ少ショウく虫ムシ多タク。二ニ月ゲツ上ジョウ旬ジュン小コ桃トウ石シ接ツぐ。三サン月ゲツ枝シを切キ

梨リ 梨リ草ソウ甲カ斐ヒ相ソウ摸モ下カ總ソウ号ゴウ少ショウく多タ他タ也ナリ。其ソノ力チカラの

志シ多タク。其ソノ生ヒ土ツチ少ショウく虫ムシ多タク。二ニ月ゲツ上ジョウ旬ジュン小コ桃トウ石シ接ツぐ。三サン月ゲツ枝シを切キ

根ネを握ウて入イへ。其ソノ力チカラの

咲サキたリ。其ソノ力チカラの

利リ木キを種タネす。其ソノ力チカラの

中ナカ少ショウく虫ムシ多タク。其ソノ力チカラの

味ミ多タク。其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

其ソノ力チカラの

林檎草

江戸下谷本所産の土地に産せり。根を少くして
 極く湿氣を透す。山の地赤土に産し。春の彼岸に海紅の石へ
 接す。むきろ接しむ接ともあり。又海棠の根を接す。砂ふし
 接す。九月に極勢より。十月に小木の近に。大木の
 根を掘。根の細き赤い切す。冬に腐る人糞を焼く。一
 三四月の間に多虫を生ず。葉より生じて葉を食す。少くは虫葉を
 かくるをよく免ぐ。又梢に絞の如き卵ありて。浮のある毛むしとあり。
 燈油を身づく。接す。一二月に古枝を伐す。種樹書曰。林
 檎蛙以鐵線尋窠内鑽刺。用百部杉木丁塞之。如生毛蟲。以魚
 腥水潑根。或埋蚕蛾於地下。

楡草

葉色花も林檎に似たり。實は楡植に似て園にて毛
 あり。根より多く小科を生ず。木の皮を伐きて接す。梨と他は
 棚ふとね。風よく振落す。一。肥に梨と同。秋熟し。葉
 色も何接す。熱灰を入。焙食べし。又生ゆ。海切置石とを
 汁を搾出。砂糖漬す。又砂糖と煮る。菓子に似たり。
 種梨と多。蟹と同食べし。種を種ぬ。多。波かきと
 ちのりあり。春彼岸より。廿日経ると。波採の石へ接す。一。さき
 芋も堅く。巻下。冬中根を掘。腐る。人糞を入。又獸肉皮
 あり。埋もより。極勢。九月より。六月土用中に。一度肥を用ね。六
 秋ふし。実をむす。

香橙花

九是四國紀伊等の暖地少くハ実を結み

肥を掘人糞小灰をまき入又獸肉と腐して入るもよし七月

肥を掘人糞小灰をまき入又獸肉と腐して入るもよし七月

肥を掘人糞小灰をまき入又獸肉と腐して入るもよし七月

柑草

紀伊國名産あり又有田の産を大あり柑橘の乾

國少く赤土ふよし二三月の以柚接てよし又拘棘の砧接もよし

冬中人糞又獸肉等根入てよし柑橘乾七月肥と燒き

米泔水を澆ハ実落む柑橘乾を貯ふ绿豆の肉納玉ハ

中ふたりハと花鏡ふてよし

金橘草

山の赤土柑云よし冬中人糞獸肉等根入て

よし。盆小植てハ三月以極整てよし。砧ハ拘棘接へ○金葉も

女入同し

柚草

赤土柑云よし。二三月以拘棘の砧接へ。冬中人

糞を根入てよし。又獸肉と入ハ実多し

無花果草

葉古枝と切きし。冬中人糞を燒べ。又三月以

物よき枝を切採て地小挿水とて灌後人糞を澆へ。年実と

結くとも大あり

揚梅草

実ハ蛇莓小似る。植てよく生ず。山の暖地ふよし。

初の葉ハ極のよく冬も枯落む。大木ふるねハ冬青の葉より

似たり。冬中人糞小灰人糞を澆べ

石播草 花小紅あり。ハヤチあり。綵纈ハ花の圍白。又白花の

のあり。惣々二月枝を管ふ切く挿ハよく治りのあり。又この

被岸ふよびつぎゆとよ。を舟根足人糞を入ハ苑客多一

茶草 葉上僧正入宗して。重て種を後せしあり。始て治ふありと

貝原翁云々。本邦喫茶ハ榮西上人より盛ふりると云々。治めてハ

上品のゆのハ二四月以芽の芽の肉。猴麻布の製あり。ワカを

圃中。中葉の葉ハ蘆簾みく圃と云。種ちみか。或赤土みく砂の

まらうたり地り。真土泥ちも悪し。湿地不宜うと云。油糟。人糞酒

粕をち根足と云。又米泔水もよくあり。用とよ。肥と云。ハヤチと云

蜀椒草 朝倉山椒あり。山をよ。冬寒瓜府バヤチと云。于縹

溝泥も利くあり。人糞を意。又刺あり。山椒あり。樹少く刺は

又常のさしせうハ多く。実を結す。去皮と樹の皮ハ堅ふ

剥てすかハ樹一葉。これ辛皮あり

葡萄草 甲斐より多。江戶へ。紫葡萄ハ実ハ氷晶

葡萄ハ実青緑して味甘し。棚を拵て蔓と栽べ。三月以枝を

切挿バよく活る。又鉢の穴より蔓を引ぬ。挿入を金。鉢又

ち海の水にぬり。切挿ハ実を結す。ちみく。ちみく。ちみく。ちみく。

ちみく。人糞又酒粕を根足入る。花後又枝の葉を用と云

甜瓜草 本。美濃四真桑村より出。の上あり。右と云。江戸

ワカ村より出たもの又上りあり。下流より出たものも大ふく味劣る。是へきんちのふくふく。入肥の法ハ越瓜と同ト

西瓜

常陸砂山。上総下総安房等の砂地。三月末種

府于繩を刻。畑白く挽粉。人糞とせ。又畑をせ。畑穴を掘。その里に種をまき。むく。芽は瓜をて。一か種を

着る。又むく。肥を足。小見。ゆき。人糞汁。海泥。を。澆。て。す。

又白西瓜あり。外皮淡緑。く。臆白。味又甘。

甘蔗

海老の砂真土。種。去。年。用。去。る。茎。を。二。節。節。を

切芽

の。節。を。接。し。一。足。を。一。か。種。を。て。多。洗。汁。を。と。く。傍。に

生。さ。す。小。科。を。切。る。べ。秋。よ。む。て。茎。の。汁。の。濃。ろ。ぬ。切。採。て。搾。す

を。汁。瓜。採。葉。粉。を。入。涼。し。ま。く。黒。砂。糖。と。す。是。を。又。き。焼。の

甕。入。二。三。丈。下。は。湯。の。の。白。砂。糖。を。扱。秋。切。採。と。さ。あ。す。

左。か。を。と。て。実。を。茎。と。撰。来。年。の。種。を。貯。べ。を。茎。を。破。入。

日。陽。よ。く。ま。る。地。を。掘。埋。ま。ま。ゆ。て。掘。い。づ。存。め。と。種。じ。

物。類。品。騰。小。園。あり。考。べ。

落花生

香。芋。花。と。も。云。和。名。と。ま。の。又。長。崎。か。て。あ。ん。ん

典籍

紀。伊。國。少。多。化。野。云。星。が。小。砂。ま。ら。の。山。畑。少。て。

陽地

種。一。冬。丹。畑。灰。人。糞。を。ま。せ。耕。並。別。小。代。を。種。落。花

生

の。莖。を。割。て。豆。ま。ら。漬。く。種。を。生。く。畑。種。べ。お。ま。の。地

種

ま。ら。畑。を。ま。ら。種。る。園。一。叔。糠。を。切。ま。せ。懇。ま。ら。す。

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

種

種。考。下

防お風の陰氣を入べし... 肥へ在の害を荷芽とせしむ... 實のり赤くありたる時...

肉右の在を切ませしむ... 二年めより少くもせ用べし... 甘草本 和名知れあよきと名本...

芍薬本 延喜式にまびすくき... 大坂より江戸へ多送せし...

真云云て毛破中よりて粘あるなり。その内人糞或ハ馬屎或
畑一切のせを極べし。八九月根を分極せり。又葉ふよりそ花の
品を分ちり。奇花は非の根を薬用べし。

牡丹

草本

和名牡丹

詞花

ふみくさ

延喜

あそくさ

萬葉

集

秘傳花

とり山城より多岐又大坂にて接はる送をたまり。秘傳花
鏡小百二十一種を載惣て赤土合肥を切を極せし。又破より
へたるもより。接法は事の牡丹の破て手接ふしとより。群芳譜に
牡丹八月接べし。又枝を打て活とり。花壇綱目小云九十月此乃
分極根りてを多く極るあり。霜月初より馬の踏る糞馬屎たよ
厚云。喜よむくをべし。破むらう油糟一升をどを。地は教茎乃

あま板は掃く多あり。花の田ハ日を透してより。夏茶滓を根に
置晩景よ米泔水或ハ水も湿をど灌ては。牡丹の芽は泥着たる
如あま米泔水よく洗べし。あま白虫けり。因を洗ごまら本
粘る実の着は六月土用と七月初に実を丸お着茶滓一升
ち灰をせり。その上よ葉がら五分をどけり。蛤貝かぶせとあり。
二月中旬の以存の貝をえり。肥ハ人糞を多切ませ。百日
ちど鉢より盆に用せり。又猪尿を用又狗糞を用て妙なりと花
鏡よ見ゆ。是ども群芳譜よ牡丹を大糞と云り。種樹書曰牡丹
丹花上穴如針孔乃其所藏處。花工謂之氣倉。以大針點硫黃
末針之喪乃死。或百部草塞之。貝原花譜曰牡丹冬至前後鐘

乳粉と硫黄とを末し。根を掘用て周圍に星べし。来春花盛なり。
牡丹道知まゝ。小科を白子と名く。分種べしと云。

黄連草

加賀菊葉の黄連上品なり。又薩摩の大葉ハ菊葉より

似く甚大なり。是亦上品なり。葉よ入す。又芥葉の物は救種あり
蝦夷の芥葉ハ多て細く青品あり。又五加葉あり。けれど二葉のの
あり奇品さる。びきり根小くて葉よ用ふ。不堪む。物て種。法ハ
大抵人參を種ると同じ。土地ハ多て竹を種ふ。日陰の地ヨ
宜し。若日陽る。多て竹の蘆の菁と編。日陰しては。雨ハ葉のるあり
か。多ともより。湿地と肥。肥よ及む。お。米泔水と澆べし。八月分
種。随分るを種く種。か。

防風草

是ハ葉よ入る。料理よ用る。あ。と。防風ハ

享保年中。漢種。今多し。山畑の畔。土厚き地。種べし。葉を

腐あり。又舊根と種。あ。二三月より。竹よて。穴と。深く。あ。は。入。て

ち。瓜。葉。よ。入。す。む。畑。を。中。肥。要。し。

當歸草

二月種を腐人糞とあ。以。用。之。年。よ。て。花。あり。実。を

採。種。べし。土地ハ。牛。房。多。種。る。ち。よ。て。赤。ち。の。地。を。種。る。砂。も。あり

たる。地。は。宜。し。寒。中。人。糞。少。用。よ。耕。て。こ。じ。二。月。種。移。す。よ。し。五。六。寸

る。紙。ち。の。種。極。西。の。後。人。糞。と。澆。べし。十。月。十。月。種。を。掘。採。米

泔。水。よ。あ。ひ。こ。し。土。氣。を。去。毎。日。日。小。乾。壺。よ。入。て。貯。べし。湯。よ。入。て。干。バ

性。味。苦。く。ち。の。る。あり

白芷 草

延喜式よりうひくまこと云山城より多作り其を神農の祀
地人妻の彼者子孫を命ぐ。種く二年目の十月根を掘採其を
白芷當掃獨活防風防葵の類は二年めより其莖まで花実あはれ
根空をちあつちあり

芳蔚 草

蜀の川州より出づ此上品と名く本邦より
通じてせんきうといふ寛永年中長崎より種来と云大和吉野にて
多作り少くもあつちの山あつち肥地より。冬舟人糞を入耕種二
三月小種くより。芽生ずくと夏より秋までの内候と把て入る。
十月末より掘く細根を去天を乾て葉を入用あり
我茂 草

此根赤し。按ずる小これ真の莖木あり。一種は官園より種来は
紫色なり。根黄色なり。然ども爵金と云気味少く異あり。此真の
薑黄あり莖木は北に種地は赤土砂土ともあり。大抵芽を種く
如くありとす。百もまきく人糞を焼べし。十月以後掘あげ乾て葉は
入べし。又よりあつちたる根を来年の種より貯べし。む子を缺ぬ根にて
但莖を切根はそのあつち。南に向く山の崖北日あたるよれ地と云
四尺掘て根を埋垂バ害并傷とす。日月入く掘いで乾根を
捨り瓜種べし

鬱金 草

葉ハ蘘荷より似て洞花ハ種をより色白し。根ハ芋より似て
長々黄色なり。山知に種べし。冬舟根瓜種と云莖木の根は葉より用

高良薑 草 葉の葉荷ふ似く多く大なり。其根を夏中人糞と

洗十月申中より唐より入べし。暖地中へ入る。其花

くよたけらしの一敷又。火少し低くと花白きものあり。是杜若なり。

燕子花の下小輝なり

桔梗 草 花は碧色。白色。とも不重瓣あり。又後あり。其の被る小

種は腐る。根は二月十月より。おふ人糞夏夏洗汁洗てより

龍膽 草 山の崖をふあり。植る地は赤を粘ある所を小はし米汁

水と洗。其の肥ハ也

延胡索 草 漢種のものハ牡丹葉と云ふ。葉牡丹に似く小なり。根

圓零餘子のごとくみく。其花を又尾張國より来るものハ三葉の

そのあり。形は牡丹葉に似く。葉中へ斑あり。花は皆地錦苗に

似く大なり。二種とも。其葉丹の上品あり。又同國より来るものハ竹

葉のものあり。葉を多く細く。葉を又似く。武勝國道灌

山より下りるものハ竹葉に似く。葉稍潤く。根小く。冷白く。下品に

山の野に生え。其根を灰人糞中へ入る。其根を肥。其根を植

地黃 草 延喜式に云ふ。其根を灰人糞中へ入る。其根を肥。其根を植

紅花のものあり。其花のあり。竹も十月根を掘採。其根を日陽

よき地へ。其根を三月より掘採。其根を赤く。其根を日陽

肥地へ栽べし。其根を灰人糞中へ入。其根を曝。其根を栽。其根を肥。其根を植

葉莖並ふる葉をとりて入す。葉はよく乾べり地黄の根と懸る桶へ或
葉を中へ細く砕き入す。十二月の月極て研を砕りけとり
葉を入す。

菊

菊の類ハ其を以て年々花形変れその教を初と。花
鏡云如劉蒙泉菊譜遂有一百六十三品。范至能史正志馬伯
州王蓋臣皆有譜其名自至三百餘種云。菊の葉を摘み
山の母の肥さるる又まがくもより。湿地と嬌とをまがくも
庭のちよ肥ち瓜合代を摘み肉二月初小庭。その葉のまがく
細き葉をとり振分けぬ處として無きと後をまがくも。極る
地ハ多中。お玉或まがくも肉や。菊と極る肥地を極。そのま

人糞瓜澆より切をせ。又人糞を入るのめとること。こ
庭より雨を除く。二月比鰯を日小くし極る。根分ハ九月比
根中よりやう葉を分りて別極る。蓋簾を低うりあを除去
まがくも。清明の日に極る花壇へ瓶のふふ厚瓜掘る中入るの
肥と鳥の屎と烟草の茎を切よ。早一ツは菊一本極る。又六七
月のうちに一度葉をけと根を入るもの。肥を多く澆る葉枯るよ。之
菊譜云養花易養葉難。又曰糞水養葉者。著ぐを深あは洗べり。
又曰以韭汁澆根妙。又清明の日に極るもの。何ぞ葉根をとり
去る。密根より虫瓜生るゆゑ。菊經曰死蟹釀水澆灌不生。
莠虫花鏡云魚腥水去蛙。蚯蚓地蚕傷根。以石灰水灌之自死。

速將河水連澆以解灰毒若黑蚰瘡其皮以麻裹筋頭持之則
 出若象幹夷似象青虫 藥菜一色食葉須早起以針尋其穴刺殺之○菊葉
 入りのハ甘菊アキコノハ母菊ハハハ者多ハハハ。花と葉ともハ中菊ハハハ大菊ハハハあり。その中菊の
 根移ハ扇造ハハハ帚造ハハハをこまに根瓜曲ハハハさふく梢を切て枝とさうせ
 五六月と六切ハハハり。夫より一枝小花一ツ着ハハハ。その枝葉ハ皆掃
 去ハハハ。初より竹或ハ帚と之ハハハ涼涼席のありしを結身ハハハとよハハハハ
 帚ハハハあり。又根瓜曲ハハハて根ハハハハ莖ハハハを之ハハハ伏ハハハて竹の枝をひくハハハ授ハハハ之ハハハ。○
 肥ハハハて花ハハハハ小咲ハハハものあり○夏菊ハ八月根瓜分ハハハ種ハハハくハハハり。寒菊の乾

多ハハハ秋ハハハ分ハハハりハハハ。又ハハハ冬ハハハ菊ハハハハ夏ハハハよりハハハ花ハハハ咲ハハハむハハハ。菊ハハハハ
 菊ハハハハ大ハハハ概ハハハとハハハ之ハハハハハハハ。必ハハハ是ハハハ小ハハハ止ハハハとハハハ淨ハハハちハハハのハハハ菊ハハハハハハハ。菊ハハハハ
 見ハハハ之ハハハ方ハハハ。又ハハハ極ハハハ小ハハハ種ハハハ樹ハハハ書ハハハ小ハハハハハハハ。○
 薄荷ハハハ草ハハハ ぬぐきと云ハハハ形ハハハハハハハ。湿地ハハハ小栽ハハハてハハハ。魚ハハハ洗ハハハ汁ハハハおハハハ焼ハハハてハハハ。○
 葉ハハハの内ハハハ刈ハハハてハハハ一日ハハハ日ハハハ小ハハハ干ハハハ。そのハハハよりハハハ陰ハハハ乾ハハハとハハハ之ハハハ。茶ハハハハハハハ用ハハハのハハハハハハハ。○
 行ハハハりハハハ。古ハハハきハハハハハハハ。味ハハハハハハハ。○
 紫莖ハハハ草ハハハ 二三月ハハハ根瓜分ハハハ種ハハハくハハハ。其ハハハハハハハ。細ハハハハハハハ。莖ハハハをハハハ切ハハハてハハハ種ハハハくハハハ。○
 溝ハハハ泥ハハハ又ハハハ魚ハハハ洗ハハハ汁ハハハハハハハ。灌ハハハぐハハハ。挿ハハハ花ハハハ小ハハハ用ハハハのハハハ。○
 酸漿ハハハ草ハハハ 根ハハハハハハハ。二八月ハハハ。濕ハハハ地ハハハをハハハ好ハハハむハハハ。其ハハハハハハハ。魚ハハハ洗ハハハ汁ハハハハハハハ。葉ハハハをハハハ澆ハハハぐハハハ。○
 又ハハハ瓔ハハハ珞ハハハちハハハづハハハ。其ハハハハハハハ。長ハハハ刀ハハハちハハハづハハハ。其ハハハハハハハ。○

本草綱目

望江南 救荒本草

又蛇滅門草と云。藤原より来る。藤原の河原豆

安房等の暖地より。安房の山に生ずる。四月種瓜有る。形状

馬蹄決明の如く。寒瓜結ぶ。連日霜降ば実のくまを瓜採

取。初より生ずる。夏井を以て洗汁人糞等を灌。十月は

商陸 本草

何處に地中をよぐ生ず。肥及及を以て寒瓜有る。其

生ず。根大くして数寸拵む。寒瓜採らば搗切菜と云。下

菖蒲 本草

種類數十品あり。澤西の湖の邊に生ずる。舟來り

其形状本邦の石菖小葉と云。又有栖川と云。葉の先皆上より

あは又漢抄ありと云。又堅く若色の筋あり。瓜令又虎の巻と云。又葉の面向く背を以て晝夜と云。その外高麗雞尾と云。又兩根と拵ずる。其ハ根の両面より鬚根瓜生ずる。云々。常は石菖中も多し。平中自然に兩根あり。其ハ根あり。又其根を拵る。法あり。常の石菖ハ皆根の腹より鬚根生ず。其ハ片根あるを以て。其ハ鬚根を剪て根をうり。を堅く起す。極む。其ハ方より根瓜生る。なり。然もとも久く極む。其ハ又常のごとく片根は込る。又石菖を石に著す。其ハ葉を拵て根瓜石に添ふ。細き針金を以て其ハ葉を絶む。水を灌と云。鬚根皆石に著す。其ハ花莖曰。胤葉蝙蝠屎を以て和し。燒ハ葉と云。其ハ

草木部 卷下

二十九

草木部

木賊草本

砂真草より。山の母草より。油槽草洗汁草

萍蓬草草本

廣草池草小草極草多草肥草及草木草を草栽草た草る草于草鯉草を草

用草て草よ草。又草葉草頗草小草じて草花草紅草色草と草帯草る草花草を草紅草か草う草る草花草ハ草又草細草葉草の草中草に草あり草。又草小草川草骨草八草苗草少草く草葉草の草形草馬草蹄草の草似草と草園草。花草ハ草

澤瀉草本

和名草さ草と草あ草の草た草と草云草澤草持草の草中草ハ草葉草園草。慈草姑草花草

極草と草同草池草次草多草小草極草且草六草肥草及草木草を草栽草た草る草于草濕草地草ハ草二草日草月草

免絲子草本

和名草絲草子草。日光草足草尾草紅草早草稻草田草本草所草在草

稀草在草所草あり草。新草本草あり草と草り草よ草り草よ草り草あり草。妙草又草生草む草と草り草物草子草あり草纏草

後草よ草り草本草の上草ま草り草。纤草根草折草れ草る草。秋草實草採草り草又草埋草貯草す草二草日草月草

以草を草知草。灌草本草あり草と草り草よ草り草よ草り草あり草。妙草又草生草む草と草り草商草今草。肥草を草自草身草

天門冬草本

葉草ハ草枝草と草似草る草。有草す草た草ら草と草云草蔓草長草く草し草て草本草

竹草を草纏草。又草特草生草の草中草に草あり草苗草小草。根草母草指草の草中草に草あり草長草。湯草を草煮草

皮草と草去草乾草て草葉草入草又草壓草石草と草自草然草汁草と草榨草き草。砂草糖草を草煮草成草

月小掘草本

五味子草本

武草義草下草地草甲草斐草等草の草山草中草に草あり草。葉草瓜草接草て草嗅草ハ草松草の草

草木部

あり葉大なりと掌の如根長して三寸にあり疣あり。又上端は白の
そのあり上品ありは物を多栽て附子を製して根の形圓くと長く
末尖まる。根九月掘採一本三寸の子を生きて製法は念を入
る。挿す地は砂土より。芋は挿す如くよは。女木陰に宜肥地をわ
肥ふ及む

連翹

多中根は人糞酒粕等入るとの。挿す中に秋を
管又切く少水浸て挿すよ活すの心む山は宜し

蔓荆子

相摸國海邊に生ず小木あり。葉圓花紫中と小
実の南燭の大きあり。是を多に用于婦人糞を冬及とも用てよ。

二月枝を管又切く挿すよ水を灌べ

山梔子

山の湿地真土をわびきく。人糞を多葉
子の用又葉は入用するあり。三月月枝を挿す。名花澤云夏

花あり挿す活す

山茱萸

信小さんとうと云。二月に少なる若色の花擧げ
圓き形を有す。葉花は用し。漢種は官園にあり。紅き実を結形状

胡顔子の如く六味丸味の補劑に入小木の材は糞を用て

生をせむ。大樹にありは肥ふ及む

枹

二種あり。葉小多き。拘棘あり刺あり。葉は入は美の
枹を用べ。真のくく刺あり。実圓くと長うす。紅く熟したる内

挿す。日小乾燥は浸焙細末とす。砂糖を少入朝夕用ては補す

老人虚人用之。又葉を採蒸貯蜜酒に炒て用べし。枸杞二月根瓜掘管小切て列小極と其葉とせざる。又挿てもの。

木瓜木

からむけハ花紅一さらきむけハ花紅きあり。継おる。

赤し。又白花もあり。二月接べし。寒中三二度も根より人糞を灌バ花実多し。又物の糞瓜用ると花鏡小貝く。

龍舌草臺灣

油葱嶺南とも云。脂液を本草小蘆薈と云。本暖國の產あり。阿蘭陀少種多し。本邦には其花と花

紅花と二種あり。其大蘿蔔の莖の如くして大あり。その飛鱈魚乃尾に似たり。夏秋ニ花咲とあり。花の莖ニハ尺あり根より小科を分極す。夏中人糞を洗汁ると多々焼てす。む盆

栽るが去乾して肉焼べし。湿るが腐易し。十月中により産むるハ入法有る。小出してす。

知

桑木

葉の圓き瓜白桑と云。又葉圓して大さ二尺むらりあるものあり。是ハ江戸小稀あり。又葉ハ花又ありて構の葉より似る瓜雜葉と云。此類は茎より細して葉も細く糸の如く。又一枝の内は圓き葉を

生むるとあり。是を女桑といふ。是ハ蚕を飼ふ。其細の圍は肥と用を。根瓜掘採て葉より入桑白皮と云。二月枝を挿てす。活りける。或ハ云桑木を屋材とするべし。

桐木

其葉の實ハ圓く有て大く乾し。其葉日あつうの如きなり。其乾めると如く秋葉瓜と云。葉より入桑白皮と云。二月枝を挿てす。

美花類 四十一種 附リ 葉或実視を凡その 十三種

櫻 大和本草に曰日本小昔の梅と云るといふ中世より様々

花とのふ又澄云ふの様あり。朝鮮小ハ様ありと云。古舟の様は

夥ありと云。山谷満たり。凡様の数を多挙てかゞくは様の類を

あつむる書ハ櫻品小洋あり。そゆに多し。ハを様の遅を泰山

府君といふ。又かを様。あさ光様。香様もあり。又寒、緋様ハ花單

あく紅くふ。開あり。彼岸様ハ單中く少く早開あり。

彼岸をぬけいとごころといふ花も枝をばりふ無くあり。是ハ

紅さものあり。懸谷様ハ八重あり。并もの大様ハ二種あり

ハ單の様ハ似たり。ハ樹の形彼岸様ハ似たり。たはたはなり。

うららぎ様ハ小ハ花辦毛の如し。うららぎ様ハ花辦のみく

花の飛郁李に似たり。後紅花を瓜結ゆ。後て合ふなり。

○おとく様ハハのさる地あり。赤花をさるふは。さるり地

極さる。葉を。二月切接あり。ハを様ハ一重の山様の花ハは

接ともよく。彼岸様又いと様の花ハ接たり。又彼岸様彼岸

さるれは花ハハの様の花ハ接たり。山様ハ一重の花ハは

又寒、緋様ハハを様ハ花ハ接たり。多々接付ハ圖(並極をを

うけと。稍と女し知し。垂。四方風圍て風雨ハ除。葉芽のやぶすうに

花て。おんを圍とるべし。さる中。花ハ人葉を入とる。極さるハ二

生いづく樹よくふらふあり

海紅草

漢渡垂絲海棠ハ今多ク。花紅して垂るゆけあり。

花色々

花色々。西府海棠なる。林檎を挿す。ハハ林檎ハ

同じ

同じ。多ク。肥と用。去毛し瓜とる。海紅ハ去被岸花ト

切接ふしては

又棠梨あり。是ハ瓜あり

木芙蓉草

花紅白とム小重瓣あり。ハ重なるハ用て三四日

なまらなり

又重瓣少く一日ハ白く。二日め小冷紅なり。首め小紅花ト

なる

是瓜添色芙蓉とも碎芙蓉とも云治花なり。惣て二月に瓜

管小切と挿す

毎年花あり。五六月多人養瓜焼す。ハ種地を

好もめる

暖地なり。十月末に葉少く幹と畏む。ハ葉花あり

掘あげて根瓜果者

ハ入重葉少く挿す

扶桑草

花紅あり。老虎黄あり。紅の重瓣あり。葉小ハ挿す

七八月

七八月に枝弄小梢と管に切く。是之肥と赤瓜入多挿す。十月

中

中より厚し瓜入へ。瓜入瓜焼す。三月に暖氣ありて

出

出。五六月人養を去て焼す

躑躅草

種敷多し。長生花林抄小見く。ハ多くちあり。

躑躅草

種敷多し。長生花林抄小見く。ハ多くちあり。

頰桐草

種敷多し。長生花林抄小見く。ハ多くちあり。

頰桐草

種敷多し。長生花林抄小見く。ハ多くちあり。

頰桐草

種敷多し。長生花林抄小見く。ハ多くちあり。

本草綱目

三十一

あり。頼朝の墓より包たる食料と云て死せしむれあり。四月梅を管下
切く赤土又土を不挿てより活りのえ。百廿年人妻行焼泥を
焼ハ花多し。然ども毒ありと云々のあるり多裁だつと云
茉莉 本 本原梅より来る。産摩少てまや中へりといふ。今江
戸中も多産。花の香気をとり。昔中人妻行を焼てより。梅雨
又ハ九月雨降るよ枝瓜挿ハ活るのこ。十月中はより産むる入へ。
そんぞんき

山茶 本

程敷多し。地錦抄云。植へハ五月中旬。挿木ころも又
六月よび挿ハ常あり。さ挿ハ枝瓜長く切ち挿て接お挿ハ
きと切口と水ふつけとそんぞんき瓜接。三百ふ一交り瓜ハ留接
つみき

石灰引切く鋸目を削。炭二と服香をとりて瓜を挿べり切く
そんぞんき挿切けり水出傷とる。板削ハ常のごとく肉を
あり。麻糸の湯づきたるふとよれ種糸とよ小挿をかきせ
物と山菜ハ根瓜悉切て挿るより。根のよとら枯る。挿條ハ切口を
二ふ刻と挿べり刻を如より根知る。む冷ぬふ二因種をく
挿るりと云。肥ハ年中人糞と根瓜之焼べり。或云山菜屋中根と
あつと云ふ。夢魂を動ことありと云む
茶梅 鏡 赤土中土の言は此より。湿地不あり。植替ハ五月
よ。挿木ハ又山菜瓜破りてそのの。挿木挿木と云は六月は。
むよび挿さし挿りて挿る。年中根瓜人糞屋中瓜へり

草木篇 種卷下

三十一

美人蕉ヒトシロ 草

本暖地の産也。葉六苞蕉に似て狭く。夏秋の両花を
開赤れとて朱に如く。夏中人糞瓜焼十月中以掘く根瓜色唐

ひろへ入る。二月出でて極るなり。

山丹花サンタン 漳州府志

又紅繡毬ヒゲキ 同とも云本暖國の産也。今薩摩より

来り多栽。葉六苞青に似て狭く。花八七月亦開紅と朱の

如く。八月枝瓜赤を挿べ。竹の肉ハ人糞瓜焼ては十月中以

入る。八月枝瓜赤を挿べ。竹の肉ハ人糞瓜焼ては十月中以

玫瑰花メイメイ 鏡

和名をさるすといふ陸奥海をふり。花は紅白乃

二品あり。実園にて赤く玉のごとく。冬復の百魚洗汁を以て

し。根瓜切分て挿べし。

むら 月季花ハ四季花あり。ちよろまの紋を右京むらと云。

又薔薇ハ花単あり。香あり。葉用。又重瓣あり。花

のあり。黄薔薇ハ花葉を以て瓜葉の如く。餘離ハ形状玫瑰

似く長大なり。花白して千葉あり。又富士山小産する。た

飛玫瑰少似く細く刺多し。花少く淡紅なり。そ外を

何も十二月に月或ハ梅雨中小勢よき枝を三寸許切て挿

活る。又赤を以て。是を小人糞を漬べし。花鏡曰。太肥則

腦生莠虫。以前銀舗中爐灰撒之則虫自死。夏間有黒翅黄腹

小飛虫。名鑄花娘子。以弊入枝挿生子。三五日後出。細青虫而

蓄黒者。食葉傷枝。

南燭草本

実小紅きあり。向日陰は植む旭少くあるふあり。

叶云又馬毛に植べし。米泔水瓜灌根か茶滓をまべし。勢よくねば

実瓜結てもおせす。南天竹人家に植て火災瓜防と花鏡ふくさう

石楠草本

日光山中禅寺湖水の傍又まご一丈餘の大樹あり。

又大峯石楠ハ葉細長し花小同し。又ひや石楠ハ形状小く

葉本のどし。是ハ石楠の影小也。白ぬるう砂と赤ちをまかふ合さ

植べし。日月八月に枝玉瓜付く挿ハ活さる。人糞よろしかりす。

米泔水又油槽等かきつて用とす。

え小しだ

括弧中に枝瓜切て赤支挿べし。干鰯人糞等用

てあり。葉と瓜瓜思ふゆへに瓜瓜地小氣又むろへへ。挿花小用とす。

紫藤草本

摂津國野田の藤ハ長さ四尺あり常の葉ぶどよ

列あり。又花大なりて短きあり。又白ふりあり。又ち用ふがハ葉も

花も小し。三月にきり挿しとす。又根瓜掘挿く石とさるとは

人糞小酒粕をまぜ根足へぞり。夏中細長き蔓をまき出すと死

その蔓瓜刈べし

鉄線蓮鏡花

山の世より酒粕人糞瓜入てあり。枝を伏て瓜

を蓋根瓜生じてを挿べし。棚を三尺ぐさの低挿ては又花白て

千葉ふるものをゆえとす。又かぎぐるまの碧色ありて花大

あり

玉薬花鏡花

長傍あり。おめんかぐさとし。享保年中漢土より

未^きと^と地^ち錦抄^{しんせう}小^{せう}貝^{かい}入^いたり。以^{もつ}物^{もの}室^{むろ}を^を入^いる^る也^{なり}。唐^{たう}む^む入^いる^る也^{なり}。八月^{はつげつ}以^{もつ}蔓^{まん}を^を切^きと^とさ^さ。或^{ある}六^{ろく}と^とり^り木^きう^うて^て三^{さん}四^し月^{げつ}小^{せう}分^{ぶん}抽^{ちゆ}て^ては^は金^{きん}葉^{えふ}を^を剥^はべ^べ下^げ

磯松^{いそまつ} 薩^{さつ}摩^ま琉^{りゅう}球^{きゅう}坐^ざの^の海^{かい}を^を石^{いし}ら^らふ^ふ小^{せう}生^{せい}子^しと^と幹^{かん}小^{せう}鱗^{りん}甲^{かう}あ^あり^りて^て蕨^{わづ}

鉄^{てつ}の^のど^ど細^{さい}て^て枝^{えだ}あり。其^{その}大^{だい}瞿^{きよ}麥^{まき}中^{ちゆう}似^にと^と園^{えん}。秋^{あき}の^の石^{いし}を^を苦^くく^くの^のの^の

花^{はな}あり。形^{かたち}如^{ごと}楸^{しゅう}中^{ちゆう}似^にて^て小^{せう}。移^{うつ}抽^{ちゆ}る^る樹^{じゆ}ハ^ハ枯^か易^{やす}。其^{その}花^{はな}を^を抽^{ちゆ}る^る赤^{せき}

ち^ち白^{はく}ゆる^{ゆる}。如^{ごと}を^を坐^ざに^に合^あせ^せ抽^{ちゆ}と^と。文^{ぶん}蛤^か蛸^{しやう}を^を碎^{さい}中^{ちゆう}の^のあ^あら^ら

浸^ひす。抽^{ちゆ}る^る尚^{なほ}分^{ぶん}ハ^ハ浸^ひあ^あハ^ハあ^あ。よく^{よく}招^{まね}治^ちて^て八^{はち}井^{せい}の^のあ^あら^ら水^{みづ}坐^ざる^るを^を

そ^そぎ^ぎに^に抽^{ちゆ}る^るは^はけ^ける^るも^もよ^よく^く獲^とる^る也^{なり}

水仙^{せんせん} 草^{そう} 本^{ほん} 農業^{のうぎやう}全^{ぜん}書^{しよ}の^の抽^{ちゆ}法^{ぽう}ハ^ハ夏^{なつ}中^{ちゆう}招^{まね}の^の塊^{かたい}を^を掘^ほ出^だして^{して}日^ひお^お乾^か人^{にん}糞^{ふん}

汁^{じゆ}小^{せう}浸^ひ置^おき^き又^{また}採^とり^りて^て日^ひお^お乾^かと^と三^{さん}交^{かう}あ^あぐ^ぐて^て吸^あ地^ちに^に抽^{ちゆ}ると^とい^いふ^ふ花^{はな}

鏡^{きやう}の^の法^{ぽう}も^も是^{これ}不^ふ似^にたり。水^{すい}仙^{せん}ハ^ハ安^{あん}房^{ぼう}國^{こく}不^ふ多^た。山^{さん}中^{ちゆう}く^く早^{はや}く^く花^{はな}を^をひ^ひく^く。盆^{ぼん}小^{せう}抽^{ちゆ}る^るハ^ハ花^{はな}吸^あぶ^ぶが^がす。地^ちお^おろ^ろと^と七^{しち}月^{げつ}以^{もつ}招^{まね}白^{はく}を^を掘^ほと^と。酒^{しゆ}柏^{はく}馬^ま糞^{ふん}人^{にん}糞^{ふん}と^と手^ての^の合^あ多^た入^いて^ての^のち^ちを^を踏^ふけ^け。夏^{なつ}中^{ちゆう}を^を坐^ざる^るを^を灌^{かん}て^てす。

花鏡^{けがきやう}云^い。七^{しち}月^{げつ}猪^{しゆ}尿^{にょう}和^わ泥^{でい}種^{しゆ}

猷^{きん}歲^{さい}菊^{きく} 臺^{たい}湾^{わん} 又^{また}雪^{せつ}蓮^{れん} 西^{せい}域^{いき}聞^き 見^み録^{ろく} ともいふ。蝦^{あざ}夷^いより^{より}シ^シユ^ユク^クト^トとい^いふ。

山^{さん}小^{せう}多^た生^{せい}す。一^{いつ}尺^{せき}あ^あり^りて^て花^{はな}大^{だい}なり。又^{また}涉^{せつ}美^み福^{ふく}素^そ多^たあり。莖^{せい}緑^{りく}色^{しき}

ち^ちと^と花^{はな}陰^{いん}著^{ちやく}なり。又^{また}重^{じゆう}瓣^{はん}ふ^ふと^と白^{はく}さ^さあり。形^{かたち}如^{ごと}ハ^ハ香^{かう}菊^{きく}の^のと^とい^いふ。

花^{はな}開^{ひら}くと^と連^{れん}。山^{さん}中^{ちゆう}を^を不^ふ抽^{ちゆ}べ^べ。盆^{ぼん}栽^{さい}ハ^ハ花^{はな}少^{せう}。花^{はな}の^の附^つハ^ハ葉^{えふ}厚^{あつ}を^を披^ひて

あ^あ。夏^{なつ}の^の内^{うち}米^{まい}泔^{げん}水^{すい}瓜^か招^{まね}白^{はく}灌^{かん}少^{せう}。油^{あぶら}糟^{そう}を^を用^{もち}む^む也^{なり}。

樟^{しやう}耳^じ細^{さい}辛^{しん} 草^{そう} 本^{ほん} 又^{また}土^{つち}を^をま^まさ^さると^とも^もゆ^ゆら^らう^うと^とも^もい^いふ^ふ加^か賀^か國^{こく}白^{はく}

草木部 蘭科

金盞花 草本

秋の彼岸小種を荷。其去或赤土のみより。多洗汁

人尿をど洗へ

千日紅花 鏡

天和貞享年中。小本邦へ移て後と云。今多し

真土赤土ともあり

二月種を荷。秋花あり。紅白二種あり

多洗汁人尿を焼ての

幽蘭 草本

秋蘭 事物

なり。秋花あり。又其に斑あり。のを地軸

又あらん。まらん。ふぐいふ。又對馬國よ。青幹蘭。紫幹蘭。東

新等あり。俗に空を蘭といふ。又漢ちより。素真蘭と稱して

舶来あり。も。小蘭。小似く。花の形。建蘭の。とく。色純白。く。て。背

綠色。紙帯。そ。香。又。愛。ま。一。蘭。中。の。奇。品。多。又。漳。蘭。ハ。葉

短し。小蘭ハ。葉短く。狭し。花の香。氣。を。勝。たり。又。る。ぎ。蘭。ハ。土。佐。國

紀伊國。葉。小。花。大。幅。七。八。分。長。さ。三。四。寸。許。り。て。形。状。竹。拍。の。葉。の

ごとく。葉。八。角。五。心。す。小。一。又。疎。疎。より。来。る。鳳。蘭。五。雜。あ。り。俗。に。昔。昔。蒲

蘭。とい。ふ。葉。大。建。蘭。小。似。く。少。く。軟。く。長。さ。二。三。尺。十。月。花。あり。又

西。山。中。小。花。す。報。春。先。鏡。あり。葉。小。蘭。小。似。く。潤。く。ま。る。花。を

因。以。春。蘭。譜。と。名。く。そ。外。蘭。の。類。多。し。又。蘭。の。形。子。形。一。し。く

蘭。の。名。あり。ゆ。ゆ。多。し。一。熱。く。蘭。と。種。を。法。品。と。あり。大。凡。赤。土。小

油。糟。干。韮。と。少。入。挿。す。り。花。壇。綱。目。に。田。螺。生。か。て。殻。も。不。碎。

大豆。煮。汁。を。多。く。小。合。口。有。極。色。腐。る。付。殻。を。去。ち。ま。ぎ。挿。へ

忌。不。ハ。赤。一。又。赤。土。小。白。め。る。ゆ。を。多。入。ま。ぎ。入。り。る。ち。小。挿。て。の。

草木部 蘭科

屎聚ハ好一風呂の糸糸折る潜てす。蘭ハ井水を忌子群芳
潜小見白常小日陰よ動す。八月抽芽す。多の底小空なり
山の黄を粗碎す。八月枝のえ。然ども霖雨のせりハ
肉へ入べ。多を極へ入る。花鏡曰。養蘭訣云。春不出。夏不日。
秋不乾。冬不溼。

一 船棋 本草

善に狹と稠と二種あり。善のせをきよくまの
る。又星あり。善の稠は善の先垂るものなり。是又同道あり。然
あふるとは。是ハあまり肥るれば斑返るもの。肥を少く用てよ入を少く
まぐ。益小極ハ斑くす。善根の本は花を同秋実糸結て形
抽のく中に実あり。玉蜀黍の穂亦似る。善小極ハよく生ず。

根ハ九月より。地ハ多く甜く好一。下谷多のなり。又赤あり
漆の揚を切手を極す。肥ハ多まのる根中へ人糞を
入てす。又油糟を解て。浸す。又月代の毛を垂てす。日陰よ
極日陽るれば。蘆菁をまて。多を極す。よ入すれば
多を極す。

万全青花鏡

種多し。長由雪山大名晴徳形多し。又

まんきんおゆの幅三分長三分なり。花実あり。あて極す
地ハ赤い。好をまて。極油糟漬のち米汁おす。浸てよ。陰休ハ
極一或ハえたゆの毒あり。然ども多ハ実糸合をり。ねハ極す
の毒ハあるなり。漢王よハ万葉の程候。よハ万年青を拜こと。

大あり。荒実とも小硃砂根の中より大あり。惣てたちをるを
 種りゆふ赤ゆるる山をよす。思なくまふをへ馬。早末るど
 多むま。肥たる赤ち狐採より解て用べ。肥小及むす。種身て後
 風旱のあ狐潜べ。油糟ハガし丹てもよ。金小種り火砂底の水枝
 の穴を大くあけ。陶器の敷を伏てあしに透りあふより。叔その
 土の中トにある。芝の塊を粗碎て底へたちをるを種へ口より
 さくくとちをあしで入る後左右へ種を動ハ種めりくへちやく終
 後より。惣てたちをるを狐垂火南小並末まある法種より。之
 蘆簾をを種ひあハまきく意を受べ。又あ戸をを種てあふあてむ。
 然どもたましくハ小南小少しあてたらしより。あまう湿るるとたけ

草休育種卷下

四十七

根腐る。惣たる日ハ毎夜雨戸を閉て露を更さまへ。夏中ハ
 二日三日めくふ小。芝の面背とも小刑毛等の乾き水を身洗へ。
 列と葉背ハよく洗へ。洗ざれば去るを生して葉落のし物より
 実を種りあ。三月以降種てあふ多の中へ前より。在れく種り実北
 色の又ゆるるふ小前へ。実生親末まに之は月以降種りく。
 ち狐どう。種り付ハ肥と勢より。接あは四月芽を生かたる付よひは。こ
 又身接りしよ。そらんたハ種の中へ接りて種り。種を伏て種り
 風小あふぐす。よく種り種考て陰雨の出屋へ
 硃砂根本 種りあり。中ハ大抵百両金小同ト。但一肥土を
 種りあへ少し加さより。おとあふあても苦うす。あさひ小少し

草休育種卷下

四十八

あてらるがゆり。さへはなれ入るるり

紫金牛 本

種多し。馬ぐく母云々の竹林の中に挿れはやく

藪茂るる。種小栽るるは秋をよくとて西除の下陰地ふまへし。

米泔水又油糟とさへ焼く

火蕉 物理

駿河安房等の暖地にて実を結ぶ実と本草の

無漏子と云ふ樹大なるもの丈小なるものあり。又招の傍に

より生るる。小科と挿れは秋涼時米高自にけりといふ。

細して枝多し。俗小蘇鉄ハ鉄を好むて。打るを打り却て悪し。

実ハ鉄を好むと云ふ火を好む。鉄ハ火氣を食ていつたに挿る

地ハさへ小鉄をすめかたらるる。金栽るる赤と砂等分小合

穂。馬ぐくハ馬。さへ油糟夏ハ洗汁人糞汁を好む。〜

招中へ入る。陽地にて乾を好湿度を好むあり。

海州骨碎補 證類本草

日光山又木曾山中多し。穂多時葉を食

招大樹の招中へ挿れは木の皮並小根這りあり。又へおへ

付ともよし。又けさうを鹿角菜小て煉。意小任て形をくら

乾。石葛又さのぶると根を付け細き割竹又銅線るとふと止

さへはなれ焼く

仙人掌 嶺南雜記

又霸王樹ともいふ。本暖國より来る駿河安房

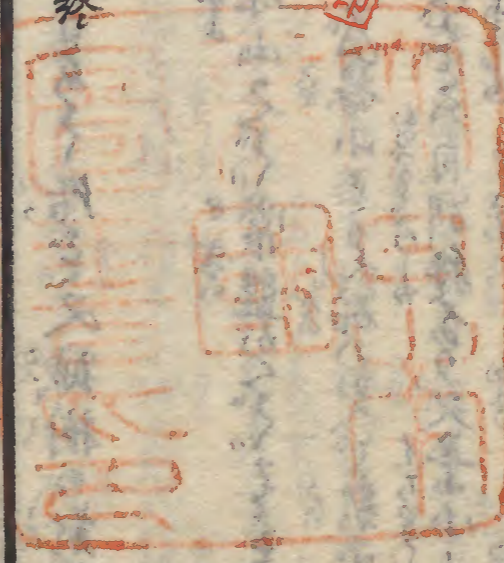
名ハ大樹あり。花は開実を結。花ハ老虎葉なり。形葉

薔薇の如く。実ハ母指の大小と中。小仁あり。耐よく生ず。又



以上百八十五品各々入の付第の國の空際ふよりて小呂の
 かねずはは法小極をす。此書小波とののハ右の品乃肉にて
 その物その物の性性を考かんの類るいを察さつして是こを合あかんぐは書るふ載のすふ果
 物ぶつのあひく。下したく鍛煉たんれんせし自然じぜん然ぜんの草木さうぼくのま入いれハるの備たふ自由
 なるべし。功こうを獲とく其理そのりを自みづかるすべし。故ゆゑふを一ひと種しゆふ貫通くわんつうと
 といふ。老農らうのうふ如ごとくあり

草木育種卷之下終



文化十五戊寅正月

江戸書林

貳町
 山城屋佐兵衛

